

# 気になる子と 特別支援教育のこれから

～現場の声と全国実態調査の結果から～

曾山和彦先生に、日ごろの活動の中で捉えられた現場の声や平成24年12月に公表された全国実態調査の結果から、これからの特別支援教育のあり方を示していただきました。



名城大学大学院 大学・学校づくり研究科および教職センター准教授  
**曾山 和彦**

そやま かずひこ\*群馬県桐生市出身。東京学芸大学卒業、秋田大学大学院修士課程修了、中部学院大学大学院博士課程修了。博士(社会福祉学)。東京都、秋田県の養護学校教諭、秋田県教育委員会指導主事、管理主事を経て現職。学校心理士。ガイダンスカウンセラー。上級教育カウンセラー。学校におけるカウンセリングを考える会代表。

著書に「時々、「オニの心」が出る子どもにアプローチ 学校がするソーシャルスキルトレーニング」、「時々、「オニの心」が出る子どもにアプローチ2 気になる子に伝わる言葉の「番付表」(明治図書)、編著書に「気になる子への支援のワザ」(教育開発研究所)、「特別支援教育に生かせるカウンセリング」(ぎょうせい)ほか多数。

資料1

## 学校現場の声

～今、気になる子とは？～

全国各地約20の学校、  
教委の先生方の声

- できないこと、おもしろくないことにキレる
- 殺す、死ぬなどの言葉を平気で使う
- 傷つくことに敏感で、傷つけることに鈍感
- 教室に入らない、教科書を持ってこない
- 友達にちよっかいを出す、嫌がることをする
- 我慢ができない、自分勝手
- みんなで遊ぶことが難しい 等々



負けてるからって怒らないでよー



感で、傷つけることに鈍感」…等の声でした。**資料1** 参照

これら先生方の声を、さまざまな講演・研修の場で紹介すると、「うちの学校の声じゃないか」と思いました。「ホント、そう思います」等の声が複数重なります。そのたびに、多くの学校で出会ってきた、気になる子、周りの子、保護者、先生方の顔がチラチラと浮かび、「私自身の実践も含め、積み上げられてきた研究・実践を整理して伝えたい」という思いに駆られます。

思いを伝える場の一つが、この本誌「Intro\*vume」の誌面。「先生方の毎日」を「応援」「する」というコンセプトに惹かれ、連載企画をお引き受けしてからはや4年。誌面を通して思いを伝え続けるうちに、私なりの特別支援教育の「王道」→「正攻法」の基本形が少しずつ整理されてきた感があります。

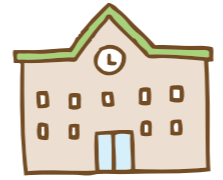
「学校現場の声に伝える、先生方を応援する、基本ステップ」をいつか示してみたい。その思いを現実のものにするために、もう少し実践に触れ、データを収集し、

本年度(平成25年度)は、特別支援教育が法的な整備を伴い正式にスタートを切った平成19年度から数え、7年目となります。

特別教育から特別支援教育への転換に際し、新たな対象として加えられた、通常学級に在籍する知的遅れのない発達障害(LD、AD/HD、高機能PDD等)児に対する指導・支援は、全国各地で実践の積み上げがなされてきています。特別支援教育コーディネーターの指名、校内委員会の設置等、特別支援教育推進に向けた校内体制も多くの学校で整ってきています。

こうした状況を鑑みれば、小・中・高等学校における特別支援教育は、よりよい指導・支援の軌道に乗ったと考えられそうですが、さて……。

本稿では、学校現場の声、最新データから、**これからの特別支援教育**を考えてみます。



### 1 学校現場の声と私の思い

特別支援教育に関する本の編集に携わった際、全国各地約20の学校・教育委員会の先生方から協力を得て、「今、学校で気になる子」について挙げてもらったことがあります。

その中で、多かったのは、「できないこと、おもしろくないことにキレる」「殺す、死ぬなどの言葉を平気で使う」「傷つくことに敏

### 用語解説

- LD(学習障害)**  
基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」または「推論する」能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す。
- AD/HD(注意欠陥/多動性障害)**  
年齢あるいは発達に不釣り合いな「注意力」、または「衝動性」「多動性」を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたす。
- PDD(広汎性発達障害)**  
「社会性」「コミュニケーション」「想像力」の3つにわたって障害を有する。PDDの中でも、知的発達に遅れないタイプを「高機能PDD」といい、高機能自閉症、アスペルガー障害、非定型自閉症が該当する。

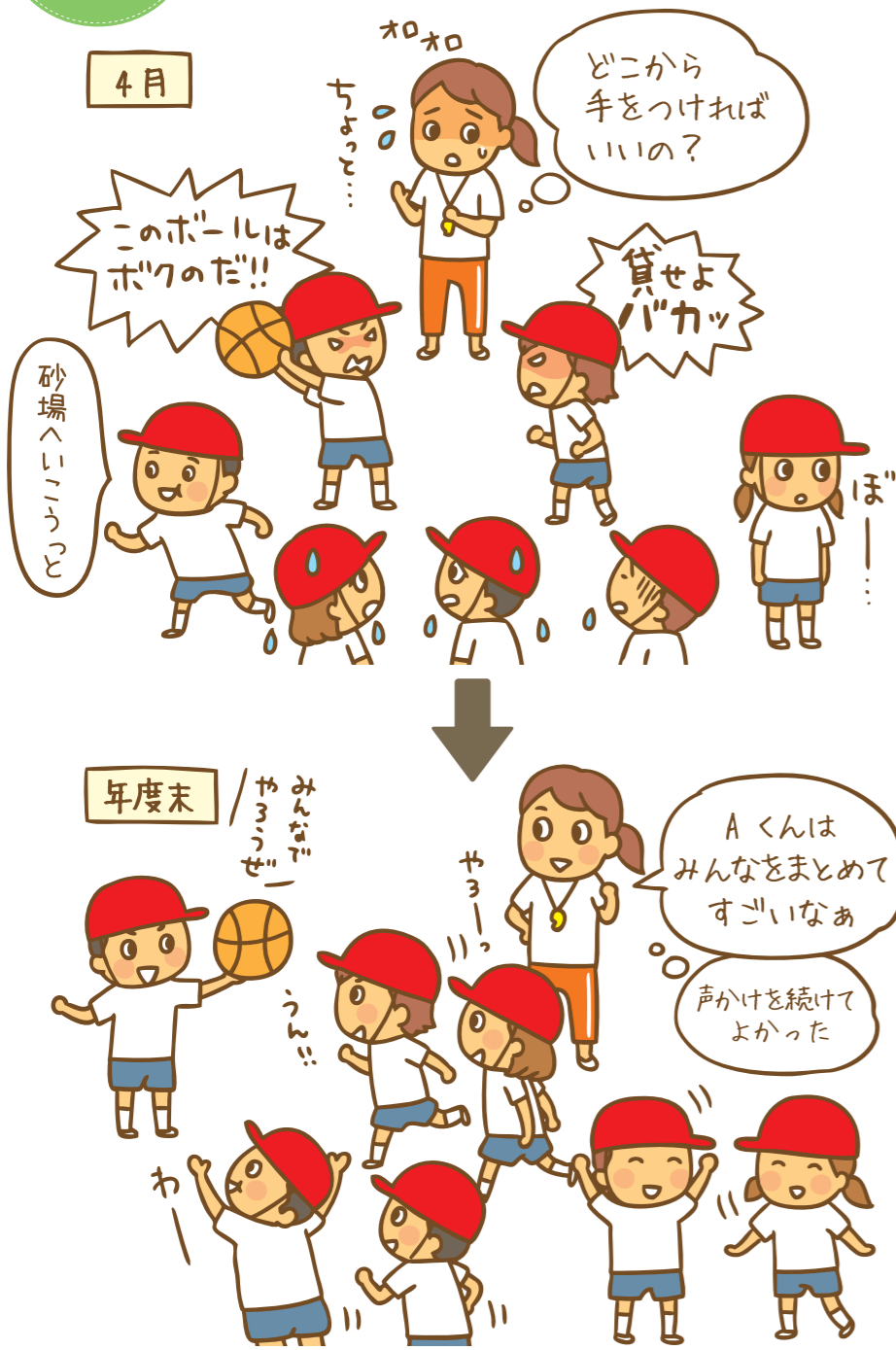
### 2 今どきの子ども像

ある研修会の参加者から、「教師や友達が話していると、『どうでもいい』『興味ない』という言葉をあからさまに示すが、その反面、自分の話は『聴いて、聴いて』と訴えてくる子どもが多い」という声が挙がったことがあります。

そのとき、「ああ、ここに、通常学級における特別支援教育の難しさがあるな」と感じました。

つまり、発達障害がある、あるいは疑いのある「気になる子」だけではなく、「周りの子」の中にも、教師が目や手を何倍もかける必要のある子どもが増えてきているということなのです。そのような子どもたちを、本稿では「今どきの子ども」として、以下、論を進めていきます。

「今どきの子ども」は、なぜ、教師や友達の働きかけをまったく受け止めず、自分の思いだけを伝えようとするのでしょうか？



この問いを考えるヒントとして、私自身、「なるほど」と納得している杉森伸吉氏の知見<sup>※1</sup>を紹介します。

杉森氏は、規範意識の低下に関する論考の中、「電車内での化粧」を例に挙げ、大人も子どもも含めた現代人の心理状態を次のように考察しています。

- ・電車内での他人は意識しないが、これから会う人は大切な人だから化粧をする。
- ・電車内の他者をも大切に思えば、恥ずかしくて化粧はできないはずである。
- ・大切に思う人の範囲が狭まったことが規範意識低下の一因である
- ・心の中が自分のことだけでは、他者を思うことはできない。

教師や友達に対して、「どうでもいい」等の言動を示す子どもたちの心の中は、「存在するのは自分だけで、相手は存在していない」状態なのかもしれません。そのような状態であれば、「心の中にいない

落ち着く学級が多いのも事実です。

担任の先生に、「どのようにしたのですか？」と尋ねると、「あきらかに繰り返して声をかけました」「短い時間でできるようにしました」「板取り入れました」

人だもん」と、子どもの心がつぶやくのも当然といえるでしょう。では、そうした「今どきの子ども」が、心の中に自分以外の他者を存在させ、大切に思う人の範囲を広げるにはどうすればよいのでしょうか？

杉森氏は、「他者に向けて心が開かれていることが必要である」と指摘し、「多様な人と心豊かな交流をした経験や、自然の中で感性が開かれた経験が豊富にある場合は、心を閉ざしにくい」と述べています。また、その根拠にもなり得る、「自然体験や生活体験が豊かなほど、道徳心・正義感が高い」という文部科学省の調査結果<sup>※2</sup>も併せて紹介しています。

「人は人の中で人になる」という言葉があるように、大人も子どもも、さまざまな人との関わり体験を通して、心の中に他者が存在させ、大切にされる人の範囲が広がっていく。通常学級における特別支援教育がよりよい形で機能するために、ペアグループワークを取り入れることの大切さが、杉森氏の知見から示唆される。

書カードのご褒美を使いました」等々、さまざまな支援に関する言葉が返ってきます。

これらの言葉を聞いたとき、私は、「子どもも先生も本当にすごいなあ」と、心の中で大きな拍手を送っています。

調査結果をもとに特別支援

私はこのように捉えています。

### 3 全国実態調査から考える、特別支援教育のこれから

昨年(平成24年)12月、文部科学省は、全国実態調査の結果を公表<sup>※3</sup>し、「知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒は6.5%在籍する」ということを明らかにしました(平成14年に実施した類似調査での数値は6.3%)。

この数値を高く見るか低く見るかは見解が分かれるところですが、「教師であれば誰もが気になる子の理解対応を求められる」という意識を高めるには、意味ある数値と捉えてよいでしょう。

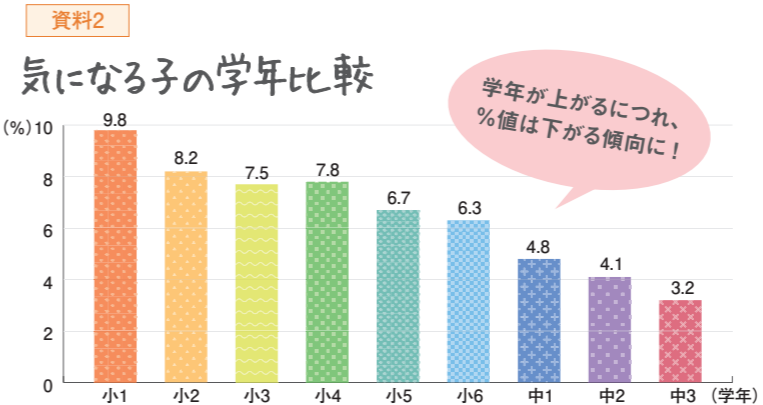
今回の調査の中で、私が注目した数値がもう一つあります。それは学年別の数値です。<sup>資料2</sup>参照

グラフに示されたように、小学校1学年では約10%の子どもが気になるのに対し、中学校3学年では約3%に数値が下がります。おおよそ右下がりの数値を見て、私は、「特別支援学級への転出もあ

教育のこれからを考えるならば、「小1対応」が一つのキーワードといえるのではないのでしょうか。保育園幼稚園、小学校のつなぎの中で、気になる子の理解と対応を確認し、周りの子とともに「人になる」ためのペアグループ等の体験を繰り返す。小学校1学年の

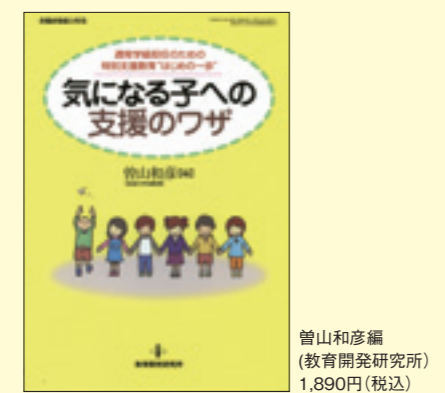
るのかな？」ということ、そして、それ以上に「先生方の支援によって子どもの状況が改善されたのでは？」という印象をもちました。

実際、学校現場を回り、1学期に小学校1学年の学級を参観すると、担任の先生が「私、もうすぐ倒れます」というほど、気になる子が目立つ学級があります。しかし、学年末に同じ学級を参観すると、気になる子が集団に溶け込み、まるで別学級のように



※1 杉森伸吉「国際社会の範として異質な他者への博愛を育む道徳教育を」『学校マネジメント』2009年12月号No.637 明治図書  
 ※2 文部科学省「生活体験・自然体験が日本の子どもをたくむ―青少年の[生きる力]をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について」生涯学習審議会(答申)1999年6月  
 ※3 文部科学省「通常の学級に在籍する発達障害のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」2012年12月5日

#### 気になる子への支援のワザ 通常学級担任のための特別支援教育“はじめての一步”



#### 時々、「オニの心」が出る子どもにアプローチ2 気になる子に伝わる言葉の“番付表”



頃から学級にうまくなじむ子どもは、学年が進行してもきつと同じように集団になじんでいく。そのような期待が私の中に、今、大きく膨らんでいます。

次号は、「小1対応」の実際として、私が出合ったお薦めの実践を紹介いたします。